

# 雲林院跡（近世以前編）

調査期間：令和5年6月29日（木）～ 8月10日（木）（予定）  
調査機関：京都市 文化市民局 文化芸術都市推進室 文化財保護課



## 1 はじめに

調査地は北区紫野雲林院町に所在し、大徳寺通（旧大宮通）と建敷北通の交差点東南角地に位置します（図1）。この場所は平安時代前期の淳和天皇の離宮であった「雲林院跡」という遺跡に該当します。今回、この地に個人住宅の建設が計画されたため、「雲林院跡」に関連する遺構・遺物の確認を目的に発掘調査を実施しています。

当該地には、明治時代以前に建てられた町家がありました（図2）。残念ながら建物は焼失してしまいましたが、礎石などが残っていたことから、基礎構造の発掘調査を行いました。現在、その下層の調査を行っています。

## 2 雲林院について

延暦13年（794）に桓武天皇が長岡京から平安京に都を移します。平安京の北側は、天皇や貴族の遊猟や行幸の場所として利用されていました。

「雲林院」は平安京の北側で、西側には船岡山を望む場所に位置し、紫式部ゆかりの地としても広く知られています（図3）。その歴史は、淳和天皇が天長6年（829）に紫野にあった「紫野院」と呼ばれた離宮に行幸したことからはじまります。天長9年（832）に「紫野院」の一部を「雲林亭」と改称したのち、全体が「雲林院」と呼ばれるようになりました。桜などの名所、風雅を楽しむ場所としても知られていました。淳和天皇から仁明天皇の離宮となり、その皇子常康親王に引き継がれたあと僧正遍昭が管理にあたり、天台宗元慶寺の別院となります。10世紀後半になると仏寺としての色が濃くなります。その後、「雲林院」の規模がだんだんと縮小していきます。応仁・文明の乱（1467～1477）により焼失します。現在の「雲林院」は、江戸時代に大徳寺の塔頭

として建てられたものです。

「雲林院跡」では、過去に数箇所発掘調査が実施されています（図1）。平成12年度に行われた調査では、「雲林院跡」の東端に位置し、平安時代前期の園池や掘立柱建物などが確認されています。そのほかの調査では、目立った遺構は検出されていませんが、平安時代前期の遺物を確認しています。

## 3 調査成果

調査は、第1面で明治時代以前に建てられた町家に伴う遺構を検出し、第2面で江戸時代後期の遺構を検出しました（図4）。第3面で中世以降、第4面で平安時代の遺構検出を行いました（図5）。

第1面は前回紹介したものに加え、新たに階段付きの防空壕と考えられる土坑1を検出しました。東西約3.7m、南北約2.0m、深さ約1.7mで、壁面などをモルタルで補強していることを確認しました。

第2面では、礎石3～7、礎石抜き取り穴及び土坑2～4などを検出しました。礎石3～5は、第1面の延石や自然石を用いた礎石列の下層で確認しました。礎石1・2の下の礎石8・9及び礎石6・7はほぼ同じ高さで据え置かれていることなどから、江戸時代以降に少なくとも2時期、建物があつたと考えられます。土坑2は、平面形が1辺約0.8mの隅丸方形で、深さ約0.12mまで炭や焼土が多量に含まれていました。土坑3は、平面形が1辺約1.2mの隅丸方形で、土器や瓦、石などがまとまって出土し、廃棄土坑と考えられます。土坑4は、平面形が東西約1.3m、南北約4.8mの長方形で、室の可能性がります。礎石4の近くでは、東西約0.9m、南北約1.5mのカマドを確認しました。

第3面では、土坑5及び建物1などを検出しました。土坑5は、染付などの近世の遺物を含んでいたことから、近世に掘られた土取り穴と思われます。中世と考えられる建物1に伴う礎石を5基検出しました。梁間2間、桁行1間以上で東側に延びていくと考えられます。また、建物1の礎石にかこまれるように成立する土坑6・7を検出し、石が多量に含まれている状況が確認できました。

第4面では、溝1及び土坑8などを検出しました。溝1はほぼ正方位の東西方向で、幅約1.0m、深さ約0.27mでした。土坑8は、溝1の南側で確認し、その上面から平安時代中期（10世紀後半）の土師器皿が出土しました。土坑8との関係から、溝1は土坑8よりも古い時期に掘られていたことがわかりました。

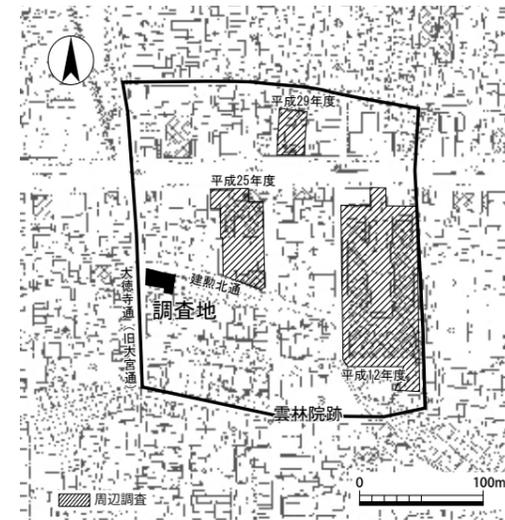


図1 調査地位置図及び周辺調査事例



図2 明治25年仮製図（赤囲み：調査地）

（大日本帝國陸地測量部明治25年3月発行仮製図を使用・一部加工。）

## 4 まとめ

今回の調査において、平安時代から現代までの様々な遺構を検出しました。

特に注目されるのは平安時代の遺構群です。これまで、平成12年の発掘調査で見つかった園池や建物跡のほかには、雲林院にかかわる遺構は見つかっていませんでした。今回見つかった土坑8から10世紀後半頃の土師器皿が出土しており、溝1はそれよりも古いことを考えると、少なくとも10世紀中頃以前にさかのぼります。いずれも文献記録に残る雲林院の最盛期の遺構であり、雲林院の実態の一端を示す貴重な遺構といえましょう。この溝は正方位を向くことから、この時期には雲林院周辺に計画的な区画がなされていたことがわかります。土坑8から出土した土師器皿の年代は藤原道長や紫式部が生きた時代のもので、藤原道長は雲林院を訪れて饗宴に興じており、今回の発掘調査地点も歩いたかもしれせん。

また、それ以降も各時代の遺構が確認でき、現代まで継続的に人が暮らしてきたことがわかりました。現在のこの地域はそのような連綿と続く歴史を刻んだ土の上にあります。

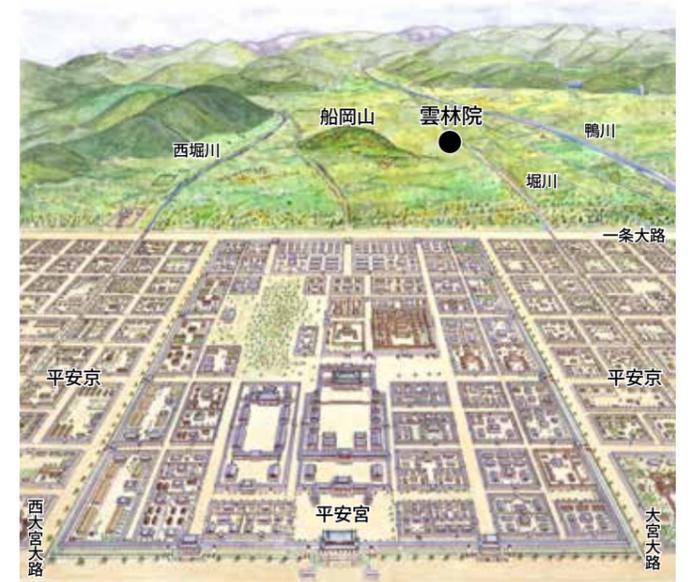


図3 平安京と雲林院の位置関係（南から）（画：梶川敏夫に加筆）



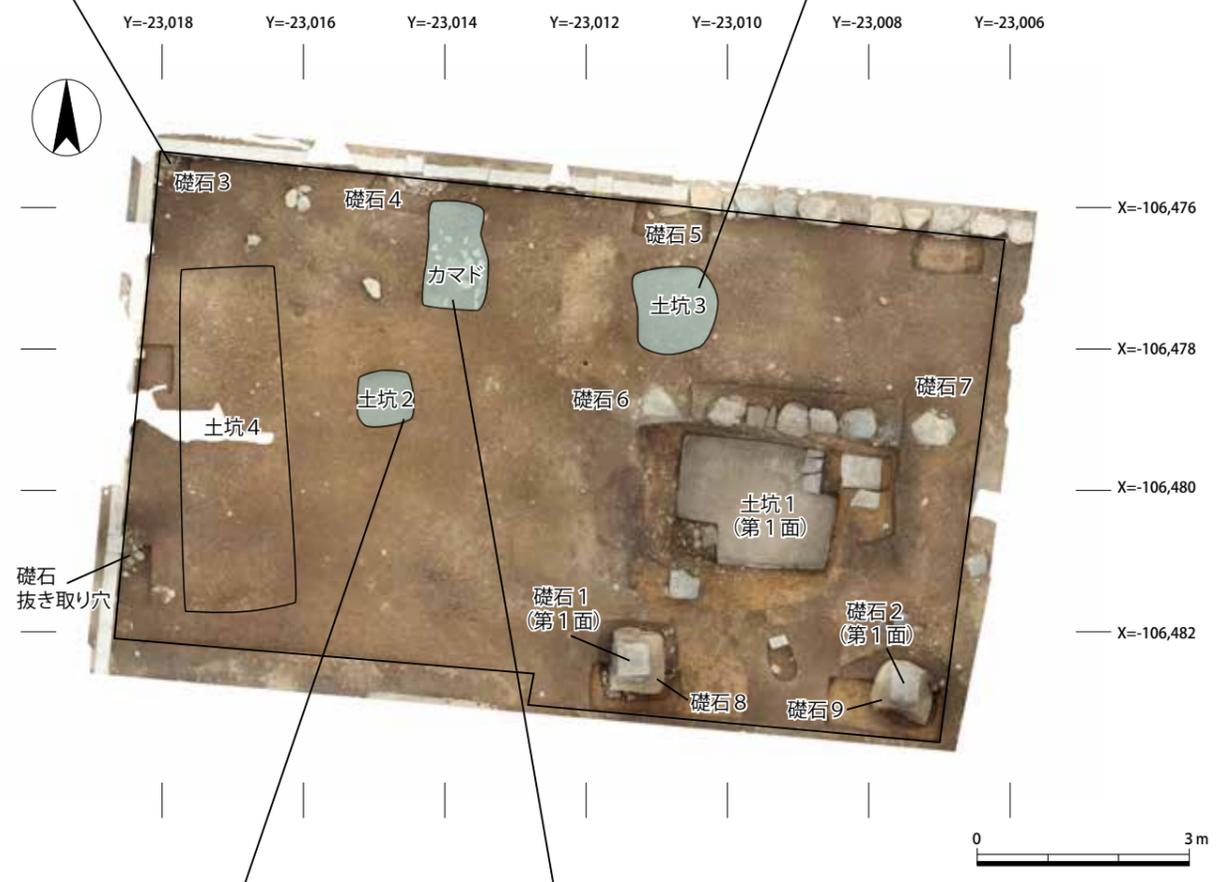
礎石3検出状況（南から）



土坑3遺物出土状況（北から）



第4面 溝1（東から）

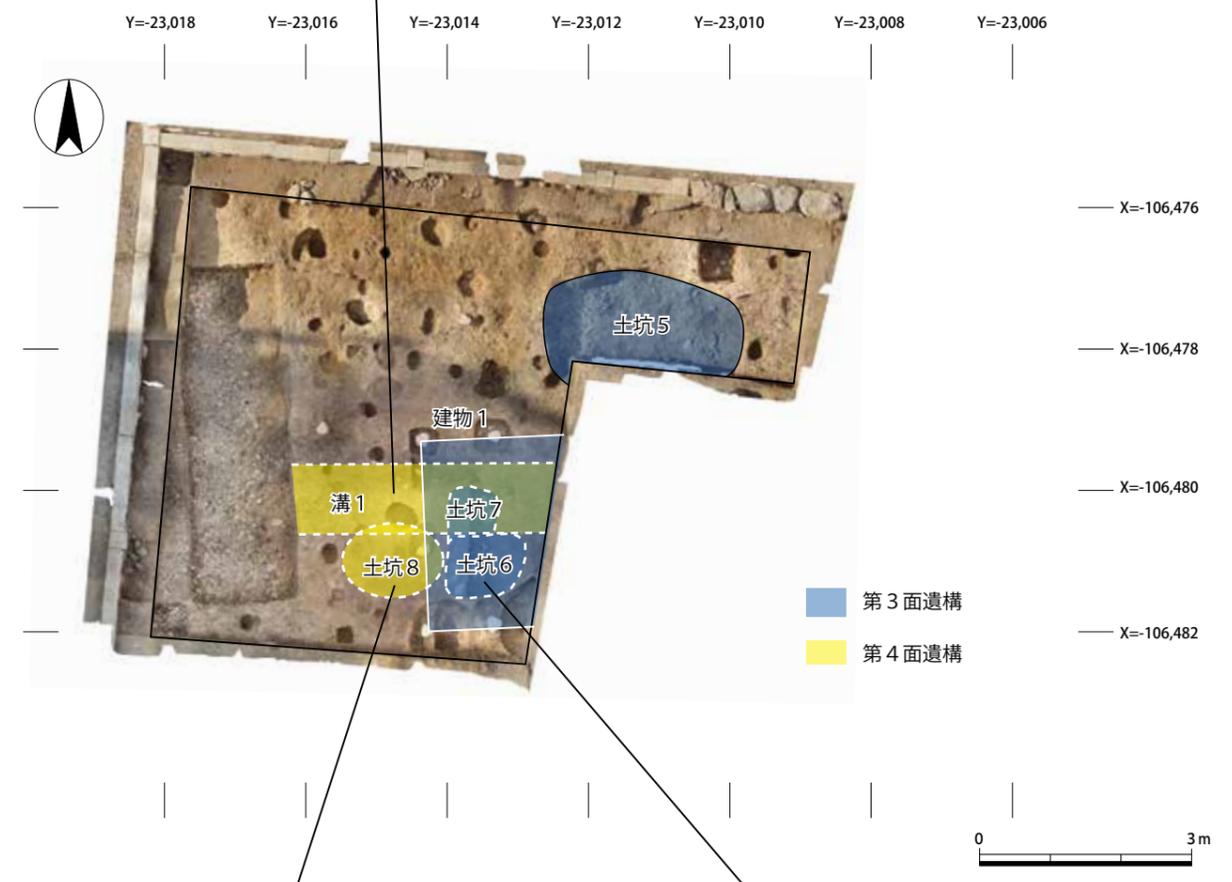


土坑2炭検出状況（東から）



カマド1検出状況（南から）

図4 第2面平面図



第4面 土坑8遺物出土状況（北から）



第3面 建物1及び土坑6・7検出状況（南西から）

図5 第3面及び第4面平面図